



Title	中国トナカイエベンキ人の社会経済変化（1947年から1960年代初頭まで）
Author(s)	思, 沁夫
Citation	社会環境研究. 2000, 5, p. 173-184
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/25860">https://hdl.handle.net/11094/25860</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 中国トナカイエベンキ人の社会経済変化

(1947年から1960年代初頭まで)

国際社会環境科学専攻

思 沁 夫

## The Social and Economic Changes of Reindeer Evenkies

(Between 1947 and the early 1960s)

Qinfu SI

### ABSTRACT

This article will review and provide an analysis on how the traditional lifestyles of Rein-deer Evenkies have had to change under the process of the establishment of the developing socialist politics, economy and institutions in China between the late 1940s and the early 1960s.

### KEY WORDS

Reindeer Evenkies, Socialist Country, unification, cange

### はじめに

私がトナカイエベンキ人と称する人々は、中国の民族分類上で「鄂温克民族」(エベンキ族)となっている少数民族の一部分である。大興安嶺の開発、漢民族の人口の急増、市場化、都市化などの形をとった国家、地方への統合によって、従来の生活形態から離され、農業に従事させられたり、または町に住むようになってきたりして、次々と森から姿を消していくエベンキ民族の中で、トナカイエベンキ人は従来の生活形態が著しく変容しながら、唯一森に残り、トナカイ放牧と狩猟によって生活を営んでいる人々である。この論文では、私が1996年、1997年、1998年と3回にわたって内モンゴル自治区呼倫貝爾盟で行った現地調査により、収集した文献資料と聞き取り調査に基づいて、1940年代後半から1960年代初頭まで中国の国家統合の中で、最も周辺地域に置かれているトナカイエベンキ人社会はどのように変化したのか、その事実関係をまず明らかにし、その上で、変化の特

質を検討したい。

### 一、中華人民共和国成立前後までのトナカイエベンキ人の生活

#### 1. 内モンゴルの政治統合

1945年8月、日中戦争終了前後から翌年にかけて、中国内モンゴル地域では自治運動が活発化した。戦略上、政治上これに注目していた中国共産党は、1945年10月23日の「内蒙工作の意見」をはじめ、次々と自治運動の方針や性質などに関する政策を内モンゴルに送り、ウランフ(モンゴル人の中国共産党員)の勢力を通じてそれらの実施を働きかけた(李 1995 P. 51)。一方、呼倫貝爾地方では「東蒙古自治運動」が広がった。1946年1月、モンゴル人とダフル人のエリートたちが東蒙自治政府を設けた。その勢力は全呼倫貝爾地方に広がり、各旗にも自分の組織を作った(スルス 1994 P. 98)。1946年3月末から4月3日にかけて、ウランフの指導により、熱河省の承

徳で内モンゴル統一のための会議（承德会談）が開かれ、1947年5月に烏蘭浩特で内モンゴル自治区人民政府が成立した（赧 1992 P. 221）。これは中国共産党の政治指導の下で、内モンゴルの地域統合が達成されたことを意味する。しかし、共産党系の自治区人民政府が成立しても、各地の「政権」は必ずしも内モンゴルの共産党側が把握していたのではなかった。例えば、1947年の春、東蒙自治政府はウランフの勢力に統合されたが、いくつかの旗レベルの組織は東蒙自治政府が消滅した後も、1947年の末まで存続していた（スルス 1994 P. 100）。トナカイエベンキ人が生活する地域の額爾古納旗の組織はその内の一つであった。この段階においては、彼らは直接政治運動に組み込まれることはなかった。

## 2. 1947年当時の額爾古納右旗と額爾古納左旗の概況

1946年末、トナカイエベンキ人の生活範囲は大興安嶺の北西部の森林地帯からアムール川上流流域までおよんでいた。行政上、この地域は呼倫貝爾盟自治政府の額爾古納右旗（額右旗と略す）と額爾古納左旗（額左旗と略す）に所属していた。額右旗と額左旗を合わせての総面積は47,973平方キロであり、その面積の60%以上が森林に覆われていた。この地域は烏瑪河、阿巴河、激流河、莫爾道嘎河、得爾布爾河など、大興安嶺の森林から源を發し、額爾古納河（アムール川の上流）に注ぐ多くの河があり、川沿いには湿地が多く存在し、交通は非常に不便であった。物や人の移動には川がよく利用された。この地域の気候は大陸性で、夏は短くて暑い、冬は長くて寒い。1947年末の額右旗の総人口は約2万人であって、そのうちの8割を「僑民」が占めていた（額爾古納右旗史誌弁 1997 P. 31 以下額爾古納1997と略す）。「僑民」というのはソ連側から移住して来た住民を指すが、1940年代、ソ連軍がこの地域を占領した時に、彼らは正式にソ連国民として登録されたため、中国側は中国に住んでいる外国人という意味で彼らを「僑民」と呼んでいた。「僑民」たちは文化、宗教

の面で中国側の住民と異なり、経済的にも自立していた。彼らは「僑民会」という自治組織を作り、周りの中国人社会から独立していた。トナカイエベンキ人は「僑民」と交換関係や文化的なつながりをもっていて、いろいろな面で彼らの影響を受けていた。

額左旗の人口は約2,000人であった（前掲書 P. 34）。人口は奇乾町と西口子という二つの場所に集中していた。奇乾町の住民は主に現地人に「二毛子」（ロシア人と中国人の混血児という意味で、少し差別的なニュアンスがある）と言われていた人たちと漢人の商人であったが、一方、西口子には黒龍江省から流れてきた金鉱山で働く人たちが住んでいた（額爾古納右旗史誌弁 1992 P. 93 以下額爾古納1992と略す）。

## 3. 1940年代末までのトナカイエベンキ人の生活

この部分の内容は主に下記の資料に基づいて構成する。

1996年の夏のフィールドワークで私は3人の高齢者（69歳の女性=Aさん、74歳の女性=Bさん、78歳の男性=Cさん）をインタビューすることができ、当時（1940年代後半）のトナカイエベンキ人の生活についての資料を得た。しかし、時間的にだいたい経ち、しかも、3人の記憶以外に頼るものがなかったため、資料は断片的なものと言わざるをえない。また、同じ調査で以下の2つの文献を入手した。1つは民族政策を実施する目的で少数民族幹部（南部エベンキ出身）として額爾古納旗政府に派遣され、1949年の冬から1950年の春にかけてトナカイエベンキ人と生活を共にし、彼らの生活状況を詳しく記録したある人（仮名吉仁）の手稿である。ただし、この資料は2つの特徴がある。1つは、トナカイエベンキ人の経済活動や社会状況についてに偏っており、トナカイエベンキ人の精神面についてはほとんどなかった。もう1つは、当時の支配的なイデオロギーの影響で、トナカイエベンキ人のシャマニズムの信仰や小屋での出産などについては、先入観をもった見方で見ていたと言えよう。

他の1つは中国少数民族社会歴史調査資料シリーズの一環として存在する『鄂温克社会歴史調査』である。この資料は1957年の調査のデータであり、調査の目的のところに書いてあるように、彼らの文化の現状を研究するためではなく、あくまでも歴史進化論の観点からトナカイエベンキ人の文化を「生きている社会化石」(内蒙古自治区編写組 1986 P. 138以下内蒙古 1986と略す)と見なし、原始社会の研究に役立てようとしたものである。この資料は年代順に書かれていないだけでなく、異なる時代の資料、たまには違う民族のデータも交じりあっている。また、内容は「物質文化」面に大きく偏っているなどの特徴もある。しかし、この資料は1950年代という、中国の政治、思想面においては、まだ「左傾路線」による「批判闘争」の雰囲気には包まれていない時期に、しかも、中国の民族学者の現地調査に基づいて書かれたため、利用価値は十分あると思われる。

#### (i) 社会組織

1947年、トナカイエベンキ人の総人口は27世帯の153人であった(額爾古納右旗史誌弁 1984 P. 7以下額爾古納1984と略す)。この153人は6つの氏族、つまりソロゴン氏族42人、クテリン氏族38人、カルタクン氏族34人、ポルトテン氏族28人、ゲリコフ氏族6人、ソロトスキー氏族5人からなっていた。これらの153人は4つのキャンプ集団によって生活を営んでいた(内蒙古 1986 P. 186)。4つのキャンプ集団はそれぞれ自分の猟場をもっていたが、はっきりした境界線はなく、他のキャンプ集団の猟場で狩猟することもできた。敵対していた2つのキャンプ集団のメンバーは相手の猟場に足を踏むことを避けなければならなかった。というのは、それによって喧嘩や殺人事件さえあったと言われるからである(吉仁 1950 P. 35)。キャンプ集団の間にメンバーの流動はしばしばあったと言われていた。とはいえ、キャンプ集団意識は強かった(前掲書 P. 36)。

AさんとBさんの話によると、すべてのキャンプ集団にシャーマンがいた。シャーマンは、

祖先の霊や自然の精霊と対話ができ、精霊たちの力を借りて病気を治すことができると信じられていたため、尊敬される存在であった。Aさんが20歳か21歳の時、彼女の父親(ウリジチ・キャンプ集団のシャーマンであった)は、24歳のジュリゴンキャンプ集団の男性を弟子として迎えた。3年後、その弟子はジュリゴン・キャンプ集団のシャーマンとなった。阿巴キャンプ集団については不明であるが、他の3つのキャンプ集団はそれぞれにリーダーがいた(吉仁 1950 P. 55)。Cさんの話によると、トナカイエベンキ人はキャンプ集団の首長をシンママロン(「公正な人」または「信頼できる人」との意味)と呼んだ。シンママロンにはキャンプ集団の会議を通じて、年長者の中から、狩猟経験が豊富で信頼できる人を選んでいった。習慣上、シンママロンの任期は3年であった(内蒙古 1986 P. 187)。シンママロンはキャンプ集団の生活活動の全般を指導あるいは助言することはできるが、強制する権限はなかった。また、皆から信頼されなくなると、キャンプ集団の会議を通じて罷免されることもあった(吉仁 1950 P. 70)。

#### (ii) 生産、分配、消費

当時、トナカイエベンキ人は男女それぞれの役割を分担していた(内蒙古 1986 P. 191)。最も重要な経済活動—狩猟は男性を中心に行っていた。彼らの住んでいる地域には獲物が豊富で、アカジカ、ヘラジカ、ノロジカ、クマ、イノシシなどを食用にし、リスは交換用に使っていた(吉仁 1950 P. 74)。食用の獲物の中で特にアカジカとヘラジカは重要な位置を占めていた。彼らが消費する肉の80%、毛皮のほぼ全部はこれらの獲物から得ていた。狩猟手段はライフルがすでに中心になっていたが、伝統的罟猟もわずかながら残っていた。例えば、リスを罟猟で捕る人も3、4人がいたようである。また、クマも伝統的狩猟方法で捕るのが一般的であった。アカジカとヘラジカの狩猟は春から秋にかけて行われる。狩猟はシンママロンの指示

に従って、3、4人の腕のいい猟師が1つのグループを組んで、狩猟に出る（前掲書 P. 77）。Cさんの話によると、リスの猟は、小麦粉、塩、砂糖、弾薬、布、マッチなどの必需品と交換するために、毎年10月から翌年の3月中旬までの期間中に行っていた。リスの移動範囲が広いので、リスの猟は1つか2つのテントを単位に、分散して行われていた。そして、3月の末、リスの猟が終わると、各テントは事前に約束した場所に集まって、各自の得たリスの毛皮を持って町に出掛け、それぞれのアンダと食品、日常用品や弾薬などを交換した。「アンダ」とはモンゴル語の「友達」を意味する言葉で、中国東北地方において先住民と交換する商人たちのことを指す。男性の仕事は狩猟以外にも、テントの骨組み、狩猟道具、生活用具の製作や修理などがあった（吉仁 1950 P. 82）。AさんとBさんの話によると、女性の主な仕事はトナカイの世話、家事、及び毛皮で家族の衣服を作ることであった。毛皮は彼らにとってなくてはならないものであった。1950年代初頭まで、彼らの衣服、寝具、テントの覆いなど、ほとんどが毛皮で作られていた。女性たちは夏から秋にかけて、毛皮をなめして、家族全員の1年分の使うものを全部作らなければならなかった。1949年、4つのキャンプ集団併せて552頭のトナカイがいた。トナカイは基本的に家族単位で所有することになっていた。各テントのトナカイはまとめて1つの群れを作って、キャンプ集団の女性たち皆で放牧し、管理していたが、トナカイの乳搾りは各テントが独自に行い、各自のもっているトナカイに限られていた（吉仁 1950 P. 89）。当時、トナカイは主に、キャンプ移動の際の荷物の運搬や老人、女性、子供の乗用、及び獲物の運搬に使われたし、またトナカイの乳を搾り、ミルクティーやクリームなどとし、重要な栄養源として利用した。婚資、葬式やシャーマンの癒す儀式の時のいけにえとして使われ、特別に食料に困った時以外は、トナカイを屠殺することはほとんどなかった。

トナカイエベンキ人社会においては多種多様な分配習慣が存在していた。例えば、動物によって分配習慣が異なり、あるいは動物の肉や皮によっても分配が異なることさえある。しかしこれらのさまざまな分配習慣には1つの共通な精神が潜んでいる。それは1つのキャンプ集団を単位に、狩猟に参加したか否かを問わず、平等に分配し（もちろんその中に労働能力を失った年寄りや体が不自由な人々も含まれる）、互いに助け合う社会を維持することであった（吉仁 1950 P. 101）。彼らの分配方法の事例のいくつかを以下に示す。(a)トナカイエベンキ人の生活にとって最も重要な位置を占めているハンダハン（ヘラジカ）とアカジカの肉と皮の分配方法。この方法を簡単に説明すると、獲物の肉はキャンプ集団の各テントに平等に分け、皮は各テントが順番にもらう。皮をもらう順番に当たったテントの女性が獲物を運んで（獲物を運ぶのは女性の仕事である）、その肉を分ける役目を務める。皮をもらいたくない時には、他のテントに譲ることもできる。その際は、譲ってもらったテントの女性は獲物を運ぶことと肉を分けることをしなければならない（前掲書 P. 105）。また、Cさんの話によると、アカジカの皮を多くもらったテントがハンダハンの皮を多くもらったテントと調整することもできた。(b)ハンダハンとアカジカの特別な部分、例えば椎骨、腰骨などについての分配方法としては例えば、もしあるキャンプ集団が6つのテントがあり、ハンダハンの椎骨が8個あると、各テントに1個ずつ分配し、余った2個は名誉の象徴として猟師がとるなどと決まっていた。(c)特別な動物、例えばクマは彼らにとっては最も象徴的な存在であり、そのため分配方法や食べ方については複雑な決まりがあって、一種の宗教的な行為と言っても過言ではない。しかも、キャンプ集団ごとにも少しずつ方法が違う。ここで、4つのキャンプ集団のある程度共通した分配方法について説明すると、2人の猟師（1人でクマを狩ることはほとんどない）がクマを殺したら、そのク

マの頭、舌、喉、皮(幾つかの部分の骨が付いている)などを柳の枝で縛って松の枝の間に置き、「風葬」する。そして、クマを撃った人はクマの前半身をもらい、もう1人は後半身をもらう。第1日目に、前半身をもらった人がクマの肉をキャンプ集団のテントの数に分けて煮て、全キャンプ集団の人達が彼のテントに集まり、決まった方法でその煮た肉を食べる。次の日に、後半身をもらった人がこれを繰り返す(吉仁 1950 P. 110)。

森の生活はいつでも恵まれているわけではないため、彼らは互いの助け合いが必要であることを森の生活経験から知っていた。彼らは分配を繰り返すことによって、あえて相互の依存状態を作り出しているのがあった。また、扶助の体制を維持することによって、ときに生じる食料不足を乗り越えることができていた。

## 二、中華人民共和国成立から1960年代初頭までのトナカイエベンキ人の経済社会変化

### 1. 内モンゴル自治区における土地改革運動と人民政府の成立

1947年10月、中国共産党は農民たちを積極的に「革命」に参加させ、国民党から政権を勝ち取るために、「中国土地法大綱」を公布した。内モンゴル自治区人民政府は中央の政策に応じて、1947年11月から、一気に内モンゴル全域で「土地改革運動」を展開した(赧 1992 P. 250)。呼倫貝爾地方において、「土地改革運動」は主に2つの目的があった。1つは「偽政府」を倒し、「人民の政権」を成立させること。もう1つは「剝削階級」(搾取階級)から土地や財産を奪い、それを「労働人民」(労働者階級)に分配することであった(呼倫貝爾盟地方史料弁 1997 P. 201)。土地改革運動は共産党組織が各地域に派遣した「工作隊」の指導下で、「階級劃分」(階級を区別すること)を行い、そして「雇農」と「貧農」出身の人たちを集め、「工会」、「婦聯」、「貧民会」といった組織を作り、これらの組織を通じて勢力を拡大

し、最終的には「人民政権」を誕生させることを目指した。また、上に述べた活動と平行して、これらの組織と重なった形で、「党支部」、「团支部」という共産党の組織を作り、政権を共産党側が把握することを最優先の「政治任務」とした(前掲書 P. 209)。土地改革運動は後に、「合作社運動」、「互助組運動」、「人民公社化運動」など、いわゆる集団化運動とつながり、この地域における共産党の政治基盤を築き上げた。

1947年11月、呼倫貝爾盟の共産党委員会が、15人の幹部から構成した「人民工作団」と共産党の北滿軍区に属する1つの中隊を額右旗に派遣し、「土地改革」政策を実施する「任務」が課せられた(呼倫貝爾盟地方史料弁 1997 P. 49以下呼倫貝爾1997と略す)。「人民工作団」は三河町に進駐後、党の「階級闘争理論」に基づいて、階層区別し、搾取階層(自治政府のメンバーや何人かの商人)に分類された人は批判闘争にかけられた。一方、「人民工作団」は「貧民」たちに呼びかけ、「工会」を作った。「工会」の中で積極的に「人民工作団」のために働いた人々を吸収し、「人民工作団」を基にした人民政府が1948年2月に三河町で成立した(額爾古納 1992, P. 62)。と同時に、額右旗と額左旗を額爾古納旗として統一した(呼倫貝爾 1997 P. 52)。それ以来、トナカイエベンキ人は額爾古納旗の住民となり、政府は「婦女解放」、「民族政策」などさまざまな名目でトナカイエベンキ人と頻繁に接触した。

### 2. 社会主義化に伴うトナカイエベンキ人社会の変化

1940年代後半から1960年代の半ばまでの間、中国の社会主義政治、経済、社会制度に組み込まれる過程の中で、トナカイエベンキ人の生活形態は著しく変容した。この時期には政府は「階級闘争」理論に基づいて彼らの社会を「改造」というやり方よりも、むしろ歴史進化論に基づいて彼らの社会を「原始社会」と認定し、しかも、日本、ロシアの植民地抑圧によって「滅亡寸前」の状態にあると考えたため、何よりも、革命の人道主義

精神の下で、彼らを「救う」ことを重要な課題とした。しかし、このような方針によって彼らの生活を「改善する」ことはあくまでも目標を達成するための1つの手段に過ぎなかった。政府が目指していたのは、彼らの社会を「遅れている社会」（原始社会）から「文明社会」（社会主義社会）に躍進させることであった。

(i) 政府のトナカイエベンキ人社会に対する「援助」

終戦による日本軍の統合経済の崩壊から1950年代初頭まで、アングとトナカイエベンキ人の交換関係は再び復活した。彼らは奇乾郷や三河町の漢人商人を主な相手に、不定期に物々交換（交換内容は1930年代とあまり変わっていなかった）を行っていた（内蒙古 1986 P. 144）。1948年に額爾古納旗人民政府の成立後、政府は土地改革運動の原則に沿って、アングとトナカイエベンキ人との交換関係は、「アングたちがトナカイエベンキ人の素朴で善良という面を利用し、彼らをだましたり、あるいは安く買い、高く売って、まさにトナカイエベンキ人を搾取する関係であった」ため、排除すべきものだと考えた（額爾古納 1992 P. 21）。1949年に、旗政府は奇乾郷で合作社を作り、トナカイエベンキ人と交換関係を結ぶ試みをした。しかし、1953年まで交換の70%はアングとの交換であって、合作社との交換は30%しかなかった（内蒙古 1986 P. 158）。1953年の後半から、この地域における人民政府の政治基盤が固まり、その上、上からの物資の補充も充実したので、旗政府は下記の措置をとることによって、状況を一変させた。政府とトナカイエベンキ人の信頼関係を築き上げるため、トナカイエベンキ人の中から合作社に働く幹部を育成した。アングがトナカイエベンキ人と交換する活動を一切禁止し、合作社を通じて彼らに物資の援助（無料で銃や銃弾を配給するなど）を行った（額爾古納 1992 P. 43）。

1950年代、全国と同様、呼倫貝爾地域にも「掃盲運動」、「識字運動」が高まっていた。そ

の一環として、政府は1953年の6月に、奇乾郷に民族初級小学校を設けた（前掲書 P. 65）。同時に、幹部らを森林キャンプ地に派遣し、トナカイエベンキ人に子供たちを学校に入れるよう呼びかけた。学校教育は政府の定めた方針に従って漢語で行われた。政府は一日も早くトナカイエベンキ人社会における「掃盲」を実現するために力を注いだ。例えば、学校の設備の充実、授業料を全部政府が負担する、さまざまなキャンペーン活動などである。にもかかわらず、実績はほとんど上がらず、入学の人数は毎年減っていた。その理由について、政府の報告書によると、1つは言語の問題、もう1つは彼らの子供が町の生活になじめないためであった（前掲書 P. 87）。

トナカイエベンキ人の母語はエベンキ語であり、文字はもたない。長い間、ロシアの支配下におかれたため、1953年の時点で30歳以上の人の中には、ロシア語を話せる人は7割位いた。しかし、彼らの中に漢語を話せる人はほとんどいなかった（前掲書 P. 122）。政府はこのような実情を把握していたにもかかわらず、教育方針を変えることはしなかった。

19世紀末、特に1940年代後半から、外から持ち込まれた伝染病、戦争や政治運動の影響などの原因によって、トナカイエベンキ人の人口は著しく減少しつつあった（1947年の153人が1957年には136人まで減少した）。政府は彼らの人口の減少をくい止め、彼らにもっと健康的な生活を与えなければならぬと考え、50年代に入ってから、積極的に医療サービスの提供に着手した。1952年、政府は医者を現地に派遣し、トナカイエベンキ人の健康状態についての調査を行った。その調査のデータによると、当時（1953年）トナカイエベンキ人全人口の約70%が、程度の差はあるが、結核にかかっていたようであった（伊寧 1998 P. 286）。1953年8月、奇乾郷で「民族衛生所」が設立され、トナカイエベンキ人は無料で健康診断や簡単な治療を受けることができるようになった。さらに、

1957年、政府は5万円の資金を導入し、レントゲンなどの新しい設備も入れた「結核病防治センター」を発足させ、結核の撲滅に力を入れた(内蒙古 1986 P. 557)。

政府の医療サービスの導入は医療設備の充実、新しい医学知識や衛生観念の普及とトナカイエベンキ人の中から「医務工作者」(看護婦や保健婦)を育成するという具体的なプロセスを通じて大きな成果を上げたが、これに伴って彼らの社会の変化も現れた。結核の治療はもちろんのことであるが、それ以外に、日常生活にも変化が起こった。例えば、下着の着用、生肉の不摂取、薬の効用への信頼の高まり、出産する時にシャーマンではなく医者に頼るなどである。しかし、変化はトナカイエベンキ人の精神面にも及んだ。例えば、シャーマンを医学の「対立物」として宣伝したため、衛生健康観念の浸透に伴って、シャーマンの影響力はしだいに弱まった。彼らがどのような精神世界をもっていたのかについては、政府や幹部らは一切理解しようとしなかった。あるいは、自文化によってシャーマンを解釈していた。例えば、ほとんどの漢民族出身の幹部はシャーマンを「跳大繩」(これは東北地方の漢民族の人達が信仰していたシャーマンのことで、革命後は批判された)と同じ、人の財をだまし取る搾取者だと見ていた。しかし、シャーマン自身は普通の狩猟民またはトナカイの放牧者であって、儀礼を行ったり、治療を施したりすることはすべて無料で行き、だれよりも献身的な存在であった(吉仁 1950 P. 51)。シャマニズムは彼らの精神世界に不可欠な存在であり、彼らの人間社会、自然界に対する理解の表現でもある。例えば、彼らの医療に対する理解は、「あなたたちのシャーマンは強い」あるいは「あなたたちはどうやっていつも瑪魯(神)の恩恵を得られるのか」といったような表現にあらわれている(前掲書 P. 88)。しかし、幹部は彼らを党の民族政策に対する理解がないと批判した。政府は、彼らのいままでの歴史や文化を「旧社会」—捨てるべきものと

して扱い、物質援助を通して彼らを一気に社会主義に「躍進」させようとした(額爾古納 1992 P. 212)。

(ii) 1950年代後半の政府のトナカイエベンキ人社会に対する政策

1957年、中央政府の民族政策の実施の要求もあって、呼倫貝爾地域における民族区域自治運動の活発化の中、盟政府や旗政府によって奇乾郷に「鄂温克民族郷」が設けられた(額爾古納 1984 P. 21)。民族郷の成立をきっかけに、政府は彼らの定住化を試みた。定住化と集団化は密接に関連していた。人が定住する中心地が集団化にとっては欠かせない条件であったからである。1950年代半ばから、人民公社化つまり集団化の風潮がこの辺境地にも押し寄せてくると、彼らの定住化は政府の大きな関心事となった。直接定住化計画を実施させたのは経済的な理由と言われている(内蒙古 1986 P. 75)。1955年のトナカイエベンキ人の狩猟収入は38,418元であったが、1956年には約5千元減少し、32,633元であった。1957年は1955年に近い水準まで達したが、1959年になると、27,000元まで減少した(前掲書 P. 557)。それ以降は毎年(この論文では1963年まで)減少する傾向にあった。政府は、狩猟経済は変動しやすいうえ、さらに、「社会主義建設」のために大興安嶺の森林は開発されるため、彼らが狩猟生活によって生活をたてることは難しくなるので、「多種多様な経済」を発展させなければならないと考えた(額爾古納 1984 P. 62)。その経済発展には定住化は欠かせない条件とされた。

1958年、国は48,000元を投入して、奇乾郷にトナカイエベンキ人の住める木造の家を立てると同時に、さまざまな宣伝や見学を通じて定住化が生活に与える便利さを理解してもらおうと努めた(内蒙古 1986 P. 557)。国はおそらく、彼らを「風餐露宿」の生活からいろいろなサービスが充実した町での生活へ変化させることが、人道的な行為と考えたに違いない。しかし、政府の予想に反して、彼らの中では郷政府

に勤めていた幹部と彼らの家族を併せて3～5世帯以外は定住する人はいなかった。彼らにとっては、移動の自由、自然との直接的な接触こそが理想的な生活スタイルであり、これを捨てることは「文明化」ではなく、罪深い行為と考えていたのである(額爾古納 1997 P. 120～121)。一方、政府側から見ると、都市文化が人類の最高の文明の形であり、民族政策を実施している幹部らにとっても、村落共同体はずっと援助しやすかった(内蒙古 1986 P. 557～558)。定住化は彼らの生活を向上させるという目的は確かにあったが、しかし、最大の関心事は、国家の政策としてトナカイエベンキ人を国家へ統合することであった。

1950年代、中央政府は「社会主義建設を支援しよう」という大義名分の下で大興安嶺森林伐採プロジェクトを発足させ、森林伐採組織を作り始めた。1950年代半ば以降、開発の全面展開に伴い、全国各地から大量の移民が殺到した(牙克石林業局 1984 P. 54)。1960年代から、機械による森林伐採や森の中の人口の増加によって、動物の減少やトナカイの餌になる苔類の破壊などの問題はすでに現れ始めていた。一方、開発は彼らに現金収入を得る機会を作った。例えば、6名の男性は狩猟生活をしながら林業局の仕事も兼ねることになった。成人男性は毎月林業局から18元の護林費をもらって、森の中の道案内やトナカイを使って測量の器材などの運搬に従事していた(前掲書 P. 58)。また、森林火災の防止という「任務」も課せられた(前掲書 P. 66)。

1950年代後半、政府は彼らの分配習慣は「原始的な」もので、生産力の発展を妨害しているとして、強制的に「修正」した(額爾古納 1992 P. 95)。修正された分配方法は、狩猟者が肉の3割をもらい、残りの7割はキャンプ集団内部で平等に分配する、毛皮は彼ら自身の判断によって分配するというような方法であった。また、政府は合作社を通じて彼らの経済活動をますます左右するようになり、キャンプ集

団組織の機能も衰退しつつあったため、彼らの伝統的な分配習慣は大きく揺れ始めた。

### (iii) 「伝統社会」組織の崩壊

1952年まで、トナカイエベンキ人は4つのキャンプ集団に分かれて生活を営んでいた。狩猟活動やトナカイの放牧はキャンプ集団によって組織されており、獲物はキャンプ集団内で平等に分配された。しかし1952年以降、キャンプ集団は政府の政治統合と林業局の管理システムに組み込まれることによって、崩壊の道をたどることになった。1952年の秋、林業局と旗政府は彼らの4つのキャンプ集団を4つの「防災組」とし、それぞれのキャンプ集団の猟場を「防災責任区」に指定した(牙克石林業局 1984 P. 67)。防災期間(毎年の3月15日から6月30日までと9月1日から大雪が降る日までの2つの期間)が設けられ、防災期間中にキャンプ集団自身の「防災責任区」を越えて狩猟することは一切禁止された。また、防災期間外でも、長距離の移動やキャンプ集団のメンバーの変動などがあった場合、郷政府に許可を申請するよう義務づけられた(額爾古納 1984 P. 39)。

それまでにキャンプ集団会議やシンママロンによって決められていた事項がキャンプ集団単位で決める事ができなくなり、キャンプ集団の組織機能が次第に衰退し始めた。1957年までは、2人のシンママロンが人民代表に選ばれたことはあったが、人民代表大会の開催期間外には普通のシンママロンとして役目を果たしていた。しかし、1957年に民族郷が設立されると、郷の15人の人民委員中、7人がトナカイエベンキ人のシンママロンまたはキャンプ集団の中で影響力をもつ人物であった(内蒙古 1986 P. 158)。彼らは政府によって任命され、常任委員として、政府のためにその役割を務めた。さらに、1959年奇乾郷は人民公社に変えられ、4つのキャンプ集団は5つの「狩猟生産小組」に編成された(額爾古納 1984 P. 53)。これは、人民公社一生産隊という行政分類に対応するために実施されたものであった。それぞれの狩猟生産

小組から、1人の組長が任命され、直接に郷政府の指示を受けるという政府の行政管理システムに組み込まれることになった。

#### (iv) 人口構成と経済社会における変化

かつて、トナカイエベンキ人は交換を行う時以外に、外の人間と接触することはあまりなかった(思 1999 P. 166)。それは、彼らが身を守るために、意識的に外の世界との接触を避けるという理由があったが、それとは別に、当時、大興安嶺北西部森林地帯には彼ら以外の住民はほとんどいなかったのも1つの理由として考えられる(趙 1910 P. 3)。1950年代に入って、この地域に大規模な主流社会(主に漢族)からの移民が流れ込んだ。移民は主に以下のルートで行われた。1954年から1955年にかけて、中国とソ連との協定によって、額爾古納旗に住んでいた7,000人近くのロシア系住民が帰国した。これをきっかけに、政府は山東省や内モンゴル自治区の昭烏達盟などから合計8,000人~10,000人の農民を額爾古納旗に移住させた(額爾古納 1984 P. 122~123)。町には「革命政権建設」(共産党の政治基盤を固める)のために、大量の幹部が自治区や盟から派遣された(前掲書 1984 P. 132)。1950年代半ば以降、大興安嶺の全面開発によって、林業局の組織は大興安嶺全体に拡大し、原始林に覆われた北西部でも、林業局の町が次から次へと作られた(牙克石林業局 1984 P. 54)。1950年代半ば以降、山東省、遼寧省、黒竜江省、河北省、四川省など出身の人たちが「親戚」、「老郷」(同郷)や「戦友」などのネットワークを通じて行う移民も急速に増えつつあった(辛 1988 P. 17)。正確な数字ではないが、1960年代初頭まで、額爾古納旗の人口は8~10万人増えたと言われている(崔 1996 P. 97~101)。

この時期の奇乾郷の人口構成も大きく変化した。1948年ごろ、奇乾郷の人口は約200人(トナカイエベンキ人は含まない)と言われ、人口の大半はロシア人と漢人の間に生まれた人たちが占めていた(額爾古納旗史誌弁 1992 P.

46)。1960年7月の額爾古納旗政府の統計によると、奇乾郷の総人口は716人、そのうちトナカイエベンキ人は146人、漢人は498人(この中の118人はロシア人と漢人の間に生まれた人達で、政治上の理由で漢族として登録した)、その他の民族人口は72人であった。したがって、地域社会全体と郷から見て、トナカイエベンキ人は「絶対的な少数派」となり、主流社会から移住した人口(主に漢族人口)に包囲された孤島のような存在となってしまった。

この地方では、民族を問わずに「幹部」、「国家職工(員)」、「農民」、「牧民」(トナカイエベンキ人はこの分類概念に当てはまる)という4つの大きなカテゴリーによって、人々を分類していた。幹部と国家職工には「都市戸籍」が与えられ、国から報酬をもらい、国や地方が提供するさまざまなサービスを楽しむことができる。一方、農民、牧民には「農村戸籍」が与えられ、農業や牧畜業などによって生活を営む。また、「農村戸籍」を持っている人達は町への移住は禁じられている。この分類方法は「社会分業」をベースに作られたものと言われている(李など 1985 P. 678)が、実際には非常に政治的な働きを果たした。つまり、この分類概念に応じて、人々はさまざまなレベルの国民教育、「共産党の政治思想」の教育などを受けさせられ、文化的にも均一化され、「漢民族文化」を主流にした「社会主義国家」へ統合されていった。また、中国の社会主義は「都市文明」をシンボルにした社会主義である(羅など 1987 P. 89)。急速な都市化は「地方文化」を崩壊させる一因となっただけではなく、それと同時に、少数民族地域の「漢化」を促すことにもなった。それは、都市、町(チベットなどの一部の地域を除いて)は圧倒的な漢族人口と漢語、漢文化を中心に構成されていたからである。さらに、これらの分類概念は中国社会の「階層化」の発展とも結び付いていた。

中国の国民統合に組み込まれる以前のトナカイエベンキ人社会は、ロシア、日本の植民地支

配を受け、従来の生活形態は変化しつつあったが、基本的には、平等で社会の階層化があまり進んでいなかった。この社会には、シンママロンやシャーマンなどの人物が存在していたが、この人たちは人を支配する権力を持っていなかった。このような理由によるものかは不明だが、地方政府は1950年代前半までのトナカイエベンキ人社会を「原始社会」と定義し、彼らは「狩猟民」として扱われた(額爾古納 1992 P. 39)。しかし、1960年代初頭までに、トナカイエベンキ人社会は国の優遇政策を受け、戸籍上は全員「都市戸籍」となったが、国家統合の浸透につれて、彼らは国家幹部(郷長1人、副郷長1人、幹部3人)、国家職員(看護婦2人、林業局の職員6人)、牧民(狩猟民)などのさまざまなカテゴリーに分類され、社会内部での階層化が進みつつあった(前掲書 P. 31)。階層化はトナカイエベンキ人社会に大きな影響を与えた。最初「狩猟民」の範疇から離脱したのは地方政府に「頭面人物」(リーダー、シャーマンなど)と呼ばれていた人たちが多かった(内蒙古 1986 P. 158)。地方政府は共産党の「統戦路線」の方針に従い、彼らにさまざまな肩書き、名誉を与え、または、郷、旗、盟などで国家幹部、人民代表などのポストを提供し、一方では、彼らを通じてトナカイエベンキ人のコントロールを行い、他方では、彼ら自身の主流社会への「変身」を要求した(孔 1994 P. 34~36)。階層化はトナカイエベンキ人社会内部に「利益追求」の不一致を生じさせ、さらにイデオロギー、文化の面での矛盾や混乱をもたらす結果となった。社会主義の目的は「階層」をなくし、不平等な社会から各民族の人民を解放することであったはずが、中国の政治統合の結果、平等で社会の階層化があまり進んでいなかったトナカイエベンキ人社会に階層化をもたらすという非常に皮肉な結果となった。

トナカイエベンキ人の経済の変化については、トナカイエベンキ人社会の生業経済が中国の社会主義経済システムに組み込まれ、そのシステ

ムの中でしか意味を持たなくなったことと、貨幣経済の浸透によってもたらされた変化という2点が言える。

1950年代半ば以降、地方政府は「合作社」を通じて、トナカイエベンキ人の経済をコントロールするようになった。交換はすべて合作社と行われ、交換物の値段や種類などは国、地方の経済計画部門のプランによって定められるようになった(孔 1994 P. 49)。1950年代からスタートした人民公社化運動の中で、1957年奇乾郷は「人民公社」と変身し、それに伴い彼らは「人民公社社員」という肩書きを持たされた(前掲書 P. 34)。これによって地方政府は狩猟活動やトナカイ飼育に直接干渉することはなかった(つまりトナカイなどを“公有化”することはしなかった)が、形式的にせよ、狩猟活動、トナカイ飼育は人民公社(いわゆる国家)のために行わなければならないとされるようになった(額爾古納 1997 P. 221)。社会主義経済システムに統合されることによって、彼らが行う狩猟活動、トナカイ飼育はこのシステムの一部として位置づけられ、彼らの収穫は国が受け取り、かわりに国から報酬、援助などの形で返ってくるようになった。

トナカイエベンキ人と貨幣との出会いは17世紀ロシアがシベリアを植民地化した時代まで遡ることができる(佐々木 1998 P. 6)。黒テンが取れなくなると、彼らは貨幣(成人男性1人、1年3ルーブル)でヤサク(毛皮税)を払うようになっていた(思 1999 P. 165)。婚資の一部として貨幣を利用したことも指摘されている(シロコゴルフ 1941 P. 448)。また、中国側の資料によると、20世紀初頭彼らが伝染病でトナカイを失った時、貨幣でロシア側のエベンキ人からトナカイを買ったと記されている(内蒙古 1986 P. 155)。しかし、日本語の文献や中国語の文献から、日本による植民地の時期も含めて、トナカイエベンキ人と異民族との交換は物々交換のほうが圧倒的に多かったという事である。トナカイエベンキ人社会の

内部においても、貨幣の使用は非常に限られていたと考えられる(吉仁 1950 P. 114)。

1950年代に入ってから、トナカイエベンキ人は主に以下の2つの方法で現金を入手するようになった。1つは合作社を通じて現金が得られるようになったのである。1950年代はじめ、彼らと合作社との交換も最初は物々交換であった。当初、これは合作社の資金不足に関連していた。資金問題が解決されると、交換は現金交換となった(額爾古納 1997 P. 224)。しかし、現金を直接彼らに手渡すことはほとんど無かった(内蒙古 1986 P. 159)。というのは、合作社は世帯ごとに「帳戶」(銀行口座のようなもの)を設け、1世帯との交換で得られた1年分の金をそれぞれの「帳戶」に記入し、そして、前年に合作社からもっていった食料、日常用品や銃弾などの品物を金に換算し、世帯の「帳戶」からそれを引き落とすという管理方法を取っていたからである。病気治療などで現金を使う必要が生じた場合は、合作社から現金がもらえた。つまり、一言でいうと合作社が彼らに代わって、貯金管理をしていた。このような管理システムを導入したのは、「トナカイエベンキ人の貨幣意識が非常に弱い」という理由があったと言われている(額爾古納1992 P. 87~93)。

もう1つの現金収入を得る手段は、郷政府や林業局からもらう給料、森林管理費(これは一部の人に限る)であり、この金は直接彼らに手渡されていた(額爾古納 1997 P. 165)。ただ扱う時間が限られる(1940年代後半から1960年代初頭まで)ことと、当時のトナカイエベンキ人社会内部で貨幣がどのように使われたかについての資料が不十分であるため、貨幣の浸透がトナカイエベンキ人社会にもたらした変化を結論づけることは困難である。本論文ではある種の傾向を示すことに留めたい。表面的に見て、アンダとの交換と合作社との交換は同じように見えるかもしれない。しかし、アンダとの交換は物々交換であり、しかも、キャンプ集団が単位で行うことがしばしばであった(内蒙古

1986 P. 534~535)。そうではない場合にしても、少なくともキャンプ集団内部で成員相互のモノの再分配が義務づけられており、同じキャンプ集団内部では、ある家族では食べ物豊富で、ある家族では欠乏しているということはありません。しかし、合作社との交換は特殊なケースにしても、本質的には現金交換であり、しかも、彼らと合作社の間に、終わりのない取引関係を形成した。この関係によってキャンプ集団での交換物の再分配は年々縮小する道を辿らざるを得ない状態となった。したがって、狩猟品の分配に直接影響が及ばなかったとはいえ彼らの消費は個人化、世帯化する傾向にあった。また、現金収入は個人、世帯によって異なるため、世帯間での経済的格差が生じた。

### 三、おわりに

1940年代後半から1960年代初頭までのトナカイエベンキ人社会は非常に短期間にもかかわらず、社会組織、経済、宗教、言語、物質文化など非常に広範囲に渡って変化してきた。彼らの従来の社会組織は社会主義国家としての中国に組み込まれることによって、崩壊した。つまり、かつては単純な組織(キャンプ集団を中心に構成された)しか持たなかった狩猟・トナカイ放牧社会は、国家の政治、経済、行政システムの末端組織(郷)に位置づけられ、直接国家の支配下におかれ、親族集団から階層社会へ、分散した遊動集団から政治的エリートによって支配されるコミュニティーへと移行した。経済面においては、親族関係、共住関係を基にした社会的な諸関係の中に組み込まれた生業経済から、国家が直接コントロールする「社会主義経済」へと統合された。たしかに狩猟とトナカイ飼育が彼らの生活を支える経済活動であることは何の変わりもないが、かつての社会の再生産を維持するものとしての意味は失ったと言わざるを得ない。

国家統合は必ずイデオロギーの面を持っている。中国の共産党と政府は一方では、「各民族は自分

の文化、習慣、宗教などを守る権利がある」と主張しながら、他方では、地方文化、各民族の「伝統文化」を排除しようとした(孫など 1990 P. 231)。このようなイデオロギーを理論的に支えたのは非常に図式化された「歴史発展段階論」, 「階級闘争理論」であった。各民族は事前にきまった分類概念(例えば, 原始社会, 奴隷社会, 封建社会など)に当てはめられ, 「伝統文化」は「迷信」, 「落後」(遅れている)などのレッテルを張られて, 批判され, 一方, 共産党のイデオロギーはさまざまな手段を通じて中央から地域社会まで浸透させられた(梁など 1987 P. 67~70)。トナカイエベンキ人社会は「原始社会」と定義され, 共産党の指導下で, 「物質基礎」から「イデオロギー」まで, いろな歴史段階を乗り越えて社会主義社会に踏み込む「歴史的な課題」を持たされた。また, 彼らのシャマニズム, 世界観, 習慣などは「迷信」として批判された。さらに, 漢語による国民教育の導入や幹部になった人たちに対する共産党のイデオロギー教育の実施は彼らの文化に大きな衝撃と矛盾をもたらした。

この小論では, トナカイエベンキ人社会が国家統合によってどのように変化させられたかを見てきた。もちろん, 国家統合によってトナカイエベンキ人社会は消滅したわけではない。実際は, 彼らの狩猟活動, トナカイ飼育はほぼ従来のままの形で行われていたし, 分配習慣も変化しながらある面では持続されていた。文化の面でも同じことが言えるだろう。今後, 1970年代以後今日までのトナカイエベンキ人社会の変化を見てゆくと同時に, 変化の中で持続は可能なのか, 彼らの生業経済と文化はどのようなつながりを持ってゆくのかななどの問題について, フィールドワークを続けながら検討してゆきたい。

#### 引用文献

- 佐々木史郎「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族学研究』 1998年 P. 3~18
- シロコゴルフ『北方ツングースの社会構成』田中克己など訳 1941年 岩波書店
- 思沁夫「中国トナカイエベンキ人の社会経済変化」金沢大学大学院社会環境科『社会環境研究』(第4号) 1999年 P. 161~170
- 崔貴文など編著『呼倫貝爾盟人文地理』 1996年 海拉爾文化出版社
- 額爾古納右旗史誌弁編『額爾古納右旗档案資料匯』 1984年 (未公開)
- 額爾古納右旗史誌弁編『額爾古納右旗文史資料』〈一〉 1992年 (未公開)
- 額爾古納右旗史誌弁編『額爾古納右旗文史資料』〈二〉 1997年 (未公開)
- 呼倫貝爾盟地方史料弁編『呼倫貝爾盟地方史料』(七) 1997年呼倫貝爾盟地方志弁公室
- 赧維民など編著『内蒙古近代簡史』 1992年 内蒙古大学出版社
- 吉仁『民族工作ノート』 1950年(手稿)
- 孔繁志『敖魯古雅的鄂温克人』 1994年 天津古籍出版社
- 羅綱など編著『社会主義建設理論』(内部教材) 1987年 中央党校出版社
- 李銳『内蒙古自治史』 1995年 内蒙古自治区党校
- 李慎など編著『法学辞典』 1985年法律知識出版社
- 梁治平など編著『超越与反省』 1987年 河北省人民出版社
- 内蒙古自治区編写組編『鄂温克族社会歴史調査』 1986年 内蒙古人民出版社
- スルスンタイ「民国, 偽滿時代以後の呼倫貝爾」中国人民政治協商會議呼倫貝爾盟委員会文史資料委員会編『呼倫貝爾文史資料』(第5輯) 1994年 P. 89~107
- 孫忠林など編著『民族区域自治法』 1990年内蒙古大学出版社
- 辛文など編著『額爾古納左旗情』 1988年 黑竜江省人民出版社
- 牙克石林业局編『大興安嶺林業志』 1984年 牙克石林业局
- 伊宇「鄂温克族人口」エベンキ研究会編『鄂温克族歴史資料集』1998年エベンキ研究会
- 趙春芳著『珠爾乾河給站辺務報告書』 1910年(出版社不明)
- (中国語の文献は中国語のアルファベット順に並べた。)